

## ンゴロンゴロ・クレーター

アニマルフォトグラファー  
トラベルライター

平 岩 雅 代

タンザニア北部に位置するンゴロンゴロ特別保護区は、世界自然遺産に登録されています。

総面積は8,300平方キロメートル。

保護区の中には、直径が長いところで約20キロメートル、短いところでも約16キロメートルもある世界第2位の大噴火口、ンゴロンゴロ・クレーターがあります。(山手線の内回りとはほぼ同じ大きさ)

このクレーターの底は海拔1,800メートル。外輪山の高さは約2,300メートルもあり、急な坂道を4輪駆動車で下ってゆくのは、スリルがあります。クレーターの中には、草原、丘、森林、湖、泉、沼、川などがあり、豊かな動物相を観察することができます。

そうはいつても、全ての種類が見られるわけではなく、キリン、インパラはクレーターの内にはいません。チーターとヒョウも出会うのが非常に難しく、ゾウは外輪山を超えることができる成長したオスだけ、といわれています。

私もこれまでに何十回もクレーターの中へ降りていますが、チーターとヒョウに出会えたのは、わずかに数えるほど……。



写真1 雄大なンゴロンゴロのクレーター



写真2 草食獣は仲良く棲み分けている

ンゴロンゴロという地名は、昔からこの土地に暮らしている遊牧民マサイの言葉で「大きな穴」という意味で、その名の通り過去活発に行われていた火山の噴火活動によって形成されたものです。クレーターの中

にあるマカッ湖には、季節によって数十万羽から百万羽ものフラミンゴが翼を休め、湖面にピンク色の桜吹雪が舞い散るかのような、見事な眺めを楽しむこともできます。

セイタカシギ、ソリハシギ、ヘラサギ、エジプトガンなどの水鳥の姿を間近かに観察することもでき、野鳥愛好家なら、一日中過ごしても退屈することはないでしょう。

ところで、何故ンゴロンゴロが“国立公園”(ナショナル・パーク)や、“自然保護区”(ゲーム・リザーブ)ではなく、“特別保護区”(コンサベーション・エリア)と呼ばれているのでしょうか？

実は以前、ンゴロンゴロは有名なセレンゲティ国立公園の一部だったのです。

ところが、先祖代々タンザニア北部を遊牧しながら移動生活するマサイの人々が飼う家畜(ウシやヤギ)と、野生動物との生活圏が度々重なるようになり、不都合が生じてしまいました。

そこで、1959年に現在のンゴロンゴロを

セレンゲティから切り離して、マサイの居住権と放牧権を認めたのです。この取り決めによって、マサイはセレンゲティに住むことはできなくなりましたが、ンゴロンゴロのクレーターの中には、家畜を連れて水辺に降りてくるマサイの人々の姿を見ることができます。

元来、マサイの間では「世界中の土地と世界中のウシは、神が我々マサイに与え給うたものである。従って我々はどこに住もうが勝手なのだ」という言い伝えがあり、決着までの経緯は易しいものではなかった、といます。

余談乍ら、ンゴロンゴロのクレーターとセレンゲティの間には、ヒトの祖先と推定される“ジンジャトロプス・ボイセイ”や、“ホモ・ハビリス”と呼ばれる哺乳類の化石が発見された、オールドバイ溪谷があります。今から200万年近く昔に暮らしていた、といわれていますが、遙か太古に思いを寄せて、感無量のまま、私はタンザニアをあとにしました。

▶平岩道夫&雅代父娘写真展「アフリカ・ケニアとタンザニアの野生動物たち」開催  
(出品点数は総合計1,400枚)

4月19日(金)から5月7日(火)までの連日、東京・市ヶ谷の「フォトスペース光陽」(JR市ヶ谷駅下車徒歩2分、江上料理学院前)で、平岩父娘写真展が開催されます。平岩道夫&雅代父娘ケニア・タンザニア訪問100回記念・アフリカの野生動物傑作写真集『平岩父娘の野生の王国』(アートダイジェスト刊・定価3,500円)出版を記念して、平岩父娘の最新大

型カラーパネル100点を展示。19日(土)の正午からは駐日ケニア、タンザニア両国大使を迎えてオープニングパーティーを開催。今春の「平岩アフリカツアー」参加者45名が撮影した、“私のアフリカ傑作ミニ写真展”(1,300点)も同時併催されるほか、4月28日(日)と5月5日(日)の両日午後3時30分からスライド上映会も実施される。入場無料。毎日午前10時から午後6時30分まで。(但し最終日は午後5時で終了)。会場道順や新写真集の問合せは電話03-3316-6234番、FAX03-3312-7558番へ。日本最大のアフリカ動物写真展会場へぜひご来場を!